

西宮市立郷土資料館ニュース 第27号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944  
電話 0798-33-1298 email nmc00065@nishi.or.jp web www.nishi.or.jp/~kyodo/



虎屋の店先（大上報文参照）



鳩小屋下（大上報文参照）

## 資料紹介

# 『洗はりゆのし クリーニング 虎屋』の洗張り道具

大上直美 (当館嘱託)

---

### 1. はじめに

今回は、1937年頃から1999年まで西宮市小松西町で『洗はりゆのし クリーニング 虎屋』を営んでいた赤松正夫氏（大正6年1月2日生）の洗張りについて紹介します。洗張りというのは、着物などを解いて反物状にしてから洗濯する技術のことで、それに使用していた道具一式を受贈しました。内容は、看板、しわをのぼすのに使った道具（砧）、手桶、桶、たらい（金たらい）、ミシン、ゆのし釜、ゆのし釜に火をかける道具（ガスバーナー、ガスバーナーの台、釜をおく台）、ハケ4、石けん2、石けんの入ったポリバケツ、ベンジン、液体洗剤の容器、作業用エプロン、しんしばり（伸子針）多数、しんしばり（張り木）59、道具箱（伸子針収納）、道具箱（張り木収納）、ヒモ類多数、ふりきり、鯨ざし、にぎりばさみ、張り木3、湯のし棒4、板17、足付き台、箱台（3）、アイロン置台、アイロン台、アイロン2、倉又式噴霧器、ものさし、たわし、竹かご、カバー、糸2、パラヂウム、ハイドロサルファイト、御通2、包み紙3、ヒモ類、ボタン類、布きれなど合計132点です。

和服から洋服へ日常着の転換、手洗いの洗濯から洗濯機の普及など現代生活の変化ともなって、これらの道具や洗張りの光景も見ることがなくなりました。

戦前から近年まで続いた「虎屋」の赤松氏から伺った話を通して、西宮における洗張り職人の生活、その技術の一面が伝えられたらと思います。

### 2. 虎屋の仕事

赤松正夫氏の話によれば、昭和のはじめ頃、西宮（芦屋から宝塚付近までのこと）には、洗い張り屋は140件ほどあり、その様子は、「今、道の角々にたばこ屋があるみたいにとくさんあって、たばこ屋よりも多いくらいだった。西宮には、酒屋が多かったので、（それともなって）桶屋や紺屋も多かった。そういったところで使う印半纏、大工が親方からもらうはっぴなどの作業着のほか、板前なんかも、長い歯の下駄履き（雨が降るとはねがつくから）に着物を着ているのが多かったから、男物の洗張りもたくさんあった。

女の人はみんな着物だったし、昔は全部着物は家で縫っていた。布団も全部といて、綿うちして作り直して使ったものだった。布団はどこでも余分にあるものだったから、1枚だけでなく客用の布団も出てきた。」といます。虎屋では、着物だけでなく布団の注文も受けていました。布団用の張り木<sup>(註1)</sup>は、着物に使う張り木よりも大きなものです。

赤松氏は、安井小学校を出てから数え年13歳で大阪の市岡にある洗張り屋に見習いに行きました。「昔は働くところはなかったし、仕事がたくさんあるわけでないから、手に職をつけなあかんとするので若い衆は小僧として見習いに行った。徒弟制度だった。住み込みで働くのが多くて、着物の洗い張り屋だと少なくとも3人は住み込みがいた。通いの人はいない所帯もっている人だった。関西は何でも一流とって、散髪でも、料理でも何でも大阪に習いにいった。関西で一人前になったもんはピカピカだといった。」というように職人見習いには大阪へ出ることが多かったのかも知れません。赤松氏が洗張り職人になったのは、「年いってからも出来るで」という御尊母の言葉がきっかけです。その頃の初任給は50銭、風呂屋代は4銭でした。「20歳で3円もらえたら最高、月給10円もらえるようになれば一人前」と言われました。

独立したのは数え年21歳の頃、兄弟が亡くなったのをきっかけに両親に呼ばれて帰った西宮の実家で店を構えました。奉公先だった親方のところと同じ「虎屋」を屋号にして、自宅の中庭と和室を住居兼作業場として始めました。

仕事の注文は、近所の人や近所の人達の口伝えなど持ちこみもありましたが、ほとんど自転車で注文をとりに行きました。荷物の運搬も自転車です。得意先のひとつは遊郭でした。「遊郭なんかだと、料金が安くても量があるから注文を取りに行った」そうです。親方のところでは、遊郭へ着物の賃貸しもしていました。

1日の仕事をする時間は決まっていませんでした。「好きな時間に始めて、仕事の区切りがつけば早く終わった。朝早くからすることもあるが、夜の方がよく仕事した。また、天気の良い時は忙しかった。天気が悪かったら休んで、中仕事をする。天気は大事。盆と正月は仕事はしない。盆に仕事をしている人を盆のアホ働きといった。冷たい時、寒い時はしない。こんな時にはつらい仕事だった。」というように、受注した仕事の量よりも特に天候に左右される仕事であったことがわかります。御家族によれば、「天気は本当にびっくりするほどよくあてた」そうです。

仕事の量は、「1ヶ月に100反は出来なかった。丁寧にすれば、80反しか出来るものではない。半襟は1日に40~50本にもなることもあり、朝から昼までかかることがある。今

はナイロンだが、昔はちりめんだった。」といます。

10円でいい着物が買えた当時の洗張りの値段は、1反を1円として1ヶ月約80円のもうけになりました。半襟は10銭で受けていました。

### 3. 洗張りの作業工程

虎屋では、次のように洗張りを行ないました。

「まず始めに、着物をほどく。ほどいた着物は、むかしの米袋の口の縫い目のように端縫いして反物にする<sup>(註2)</sup>。

それから、洗いの作業をする。洗いは、中庭に作りつけた洗い桶<sup>(註3)</sup>の上に板を渡して、その上に反物を置いて洗う。

洗いがおわると、ゆすぎをする。洗った反物は、まず洗い桶に渡した板の上に備えておいた丸い桶でざぶざぶゆすぎ、それを下方の洗い桶に垂れ落とししていく。洗い桶の中でまたゆすぐ。それを今度は別のたらいに入れてゆすぐ。これをくり返し3回ゆすぐ。

それをしぼり機<sup>(註4)</sup>にかけたあと、しんしぼりで干す<sup>(註5)</sup>。

仕上げは、端縫いをほどいた生地のはつれたところをハサミでそろえる。ミシン<sup>(註6)</sup>で縫い合わせてからアイロンをかける<sup>(註7)</sup>。

湯のしは、二人で湯のし釜をはさんで立って反物の両端を持って蒸気にあてた<sup>(註8)</sup>。」

### 4. 洗張りの技術と道具

「怒られてばかりで、自分で見て習った。仕事は教えてもらったことなんてない。」というのが赤松氏の見習い時代です。小僧の仕事はゆすぐのと干すのだけで、洗うのははげしてしまうのでできなかったそうです。タワシで洗うのは職人だけでした。

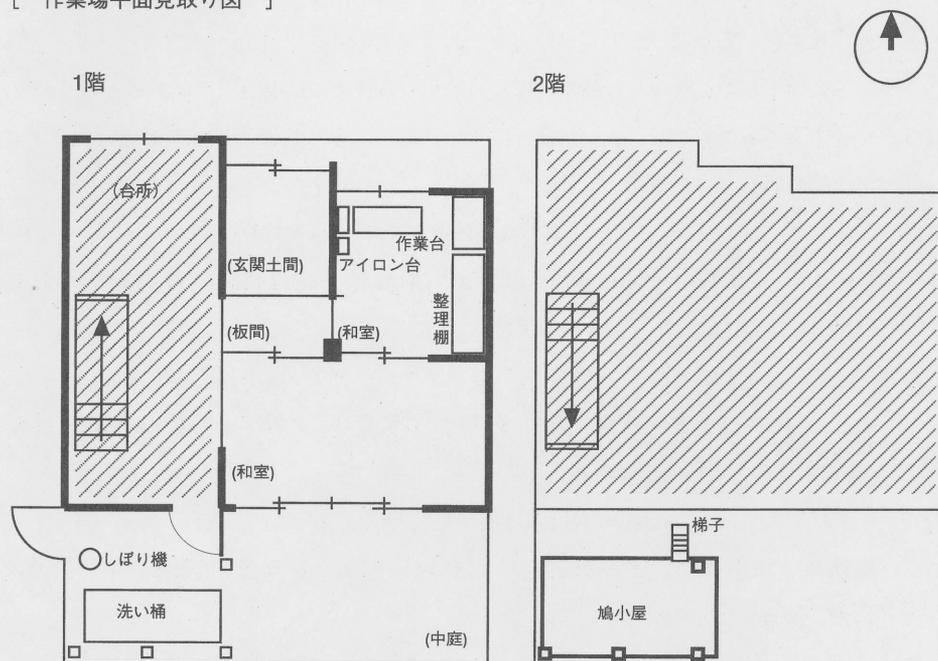
洗張りの作業工程のなかで難しいのは「洗い」です。「着物の洗いは上手下手ができる。生地をつやとかを出すように丁寧にした」という言葉の内に絹物の扱いの難しさが窺われます。

洗いには竹製のささら<sup>(註9)</sup>が使われました。虎屋ではハケと呼んでいました。洗剤には、パラジウム<sup>(註10)</sup>やハイドロサルファイト<sup>(註11)</sup>、固形石けん<sup>(註12)</sup>などを使用したようです。ほかに「石井のベンジン」の容器があります。洗いのあとに使うしぼり機ですが、それは手動式です。取っ手を回すと内槽部分が回転して、本体外面に開けられたたくさんの小穴のところから水気がとぶようになっています。昭和のはじめ頃には市販されていたといま

す。そのほか、オイル缶を転用して作った湯のし釜に火をかける時に使うガスバーナーの台や箱台など手製の道具があります。箱台は3個組み合わせて収納できるように作られています。

以上、いくつかの道具について挙げましたが、このように、洗張り道具を一括して収蔵する例はあまり聞きません。職人の話を伴った貴重な資料として当館展示で公開する予定です。

[ 作業場平面見取り図 ]



註

- (註1) 木製、長さ133.3cm 高さ3.4cm 幅3.5cm。
- (註2) 縫製は、奥の間（四畳半和室）でしていた。作業台、踏み台、仕上げた着物をしまっておく整理棚、ミシン、ハサミ、アイロン、アイロン台などの小道具が置かれていた。
- (註3) コンクリートで作られた専用洗い桶。自宅改築のため、受け取りに行ったときには既に壊された後だった。桶跡の寸法は、長さ約179.0cm 幅約145.0cm。赤松氏によれば、「サイズは特に決まっていない。自分の家の庭に合わせて作った。広ければ広い方がいいが、（自分のところは）小さい。」という。
- (註4) しぼり機は、洗い桶の横に積んだブロック上に固定されていた。かなり重量がある。鉄製、本体長さ77.5cm 高さ69.0cm 幅52.0cm、内槽高さ27.5cm、直径43.0cm。

- (註5) しんしばりは、玄関前の道のところでしていた。赤松氏によれば、「干し場には広いスペースが必要で、奉公先には干し場があった。大きいところだと30尺の屋根つきの干し場が設けられていた」という。
- (註6) 鉄製、長さ39.5cm 高さ24.2cm 幅23.7cm。「NEW JAPANESE SEWING MACHI□ EASY FORVNGIRI」の刻印がある。
- (註7) 奥の間にある作業台の上にさらに箱台を載せて、アイロンを立てかけていた姿をよく見たという御家族の話があった。
- (註8) 普段、湯のしの作業は中庭でしましたが、雨の日だけは、居間（八畳和室）の真ん中に湯のし釜を置いてした。湯のしはひとりではできないので、手伝いの人を一人頼んで来てもらっていました。湯のしと着物をほどいたりする作業には妻の手伝いがあったという。
- (註9) 竹製、長さ6.5cm 幅3.1cm。新品のラベルには、「意匠登録出願中 特1号 栃木県藤岡町 阿部商事」とある。
- (註10) プラスティック製容器のラベルには、「PARAGIUM 専賣特許 パラジウム防水剤料、PARAGIUM, KYOTO JAPAN, PREPARED BY OHARA, EXCELLENT WATERPROOF, TRADE MARAK, 全型登録」]
- (註11) プラスティック製容器のラベルには、「ハイドロサルファイト、Hydro Sulphite, 500g、未来を見つめ生活を化学する、恵比寿薬品化工株式会社 本社・大阪市中央区内平野町3-3-2 工場・大阪市西成区出城2丁目2-20, 040511」]
- (註12) ナイロン製袋には、「NEW 純せっけん、品名 洗濯用石けん、成分 純石けん分 (98%) 脂肪酸ナトリウム、玉の肌石鹸株式会社 〒130東京都墨田区緑3-8-12 03-3634-1345, 190g」とある。

## 付記

本資料は、2000年5月から6月かけて、3度にわたって収集しました。赤松氏とお会いしたのは2度目の時です。前日に病院から退院されたばかりだったのですが、たくさんのお話を教えて下さいました。はっきりとした口調で話され、まさか2日後に訃報を聞くことになろうとは想像もしていませんでした。赤松正夫氏が洗張り道具の中でもっとも大切にしていたものは、ミシンとにぎりばさみです。それは、独立したときに大工をしていた御尊父が買ってきてくれた品です。「当時のお金で3円、今で3万円くらいするもの。安いのは全然違う。高い方はきれがいい」といって、この「いい方のはさみ」だけは手元に残されたのが印象に残っています。本稿をもって、赤松正夫氏の御冥福をお祈り致します。また、御協力いただいた御家族の方々には心より御礼申し上げます。

# www.nishi.or.jp/~kyodo/ インターネットウェブページのご紹介

---

当館では、1998年から、西宮市立郷土資料館 on the webとして、インターネットウェブページ（ホームページ）を設け、西宮地方の歴史と文化に関する種々の情報を掲載しています（『西宮市立郷土資料館ニュース』第25号参照）。おおむね1か月に1度の更新によって、現在、約500ファイルを公開しています。メニューは、

トピックス（更新した内容、最近のニュース）

展示室 PLUS+（展示・講座・ハイキングなど）

収蔵庫

書庫（西宮市立郷土資料館ニュース、カタログ、西宮の歴史と文化を知る参考図書）

文化財（文化財情報）

行事予定（西宮市立郷土資料館の行事予定）

西宮市立郷土資料館に行くには（地図、連絡先）

西宮市立郷土資料館 on the web について

阪神間の美術館・博物館

となっています。単なる行事の広報媒体ではなく、特に、ニュースやカタログなどのテキスト情報、市内指定文化財の情報、これまでに開催してきた展覧会のもようや講演会などのデータを充実させ、資料館アーカイブとして、西宮の歴史と文化や館の活動を知っていただくことに主眼をおいています。

URL=<http://www.nishi.or.jp/~kyodo/> をアドレスにタイプしていただくか、西宮市のホームページ (<http://www.nishi.or.jp>) の「歴史と文化財」からも入場することができます。また、GooやYahoo、Infoseek、Googleほか、主要な検索エンジンからもたどることができます。ご訪問をお待ちしています。

寄贈資料一覧（平成12年7月～12月、敬称略）

煎茶セット・写真（織田彰子）、瓦木村解村記念硯一式（池内美規）、単級小学尋常日本讀本卷二・卷三（河野安政）、教科用図書・アサヒグラフほか（玉川浩介）、日本建築協会主催住宅改造博覧会絵はがき（南波壮八）

ご寄贈ありがとうございました。

---

西宮市立郷土資料館 春の催しもの

第18回 企画陳列「収蔵民具で20世紀を回顧する」

1期『仕掛けて、大漁！』1月9日(火)～2月4日(日)

2期『男の装い』2月6日(火)～3月4日(日)

3期『器の中の絵画世界』3月6日(火)～3月25日(日)

平成12年度 第3回 歴史講座

臨地学習会『丹波篠山を訪ねて』3月11日(日)午前9時～午後5時ころ

2月23日必着で、往復はがきでに名前・住所・電話番号・年齢を書いて、申し込んでください。応募多数の時は抽選になります。

いずれも、くわしくは、西宮市立郷土資料館までお問い合わせください。インターネットでもくわしい情報をご覧になることができます。（電話番号0798-33-1298、電子メールNMC00065@nishi.or.jp、URL=<http://www.nishi.or.jp/~kyodo/>）

---

目次 CONTENTS

資料紹介 「洗はりゆのし クリーニング 虎屋」の洗張り道具（大上直美）… 2

[www.nishi.or.jp/~kyodo/](http://www.nishi.or.jp/~kyodo/)インターネットウェブページのご紹介… 7

寄贈資料一覧… 8

西宮市立郷土資料館 春の催しもの… 8

---

西宮市立郷土資料館ニュース第27号 2001年2月14日